

第36回全日教連教育研究全国大会(岐阜大会)開催!



香川県教職員連盟機関誌
発行所:香川県教職員連盟
発行者:北村 顕吾
〒760-0004
高松市西宝町2丁目4番60号
香川県教育会館602号
TEL (087) 835-2721
FAX (087) 835-2723

仲間とかかわって踊る喜びを味わえるよう、イメージと動きのつなぎに焦点化した授業づくり(二年度)のテーマで実践発表した。昨年度の課題から授業研究を行う中で、イメージしていることをどうやって動いたらいいか分からない、動いても何を表しているか分からず、動きの質が高まらないといった子どもが、明らかに焦点化した授業づくりを行って、両者のつなぎを解消し、すべての子どもが表現運動を楽しめる授業づくりを分かりやすく発表された。また、丸亀市立城小小学校教諭・石丸義久先生は特別支援教育部会において、「脳科学の視点を取り入れた学習指導の工夫」のテーマで実践発表した。自閉症・情緒障害学級に在籍する児童、通常学級に在籍するASD(自閉スペクトラム症)、ADHD(注意欠如多動症)、SLD(限局性学習症)への対応と指導に毎日奮闘しており「今まさに、目の前の子をどうにかしたい」「何か効果的(具体的)な指導方法を知りたい」という現場の状況を踏まえて、その実践と具体的な取組について詳しく発表された。



八月十日(土)〜十一日(日)に、岐阜県岐阜市内の長良川国際会議場・都ホテル岐阜長良川において、第三十六回教育研究全国大会が盛大に開催された。十日(土)の分科会では、香川県からお二人の先生方が発表された。坂出市立川津小学校教諭・谷口翔平先生が健康教育部会において、「表現する楽しさを感じ、



か、児島邦宏先生(東京学芸大学名誉教授)、「深い学び」を深めよう」、押谷由夫先生(武庫川女子大学大学院教授)、「特別の教科 道徳」の指導と評価、学校を真の人間教育の場にする」、阪根健二先生(鳴門教育大学教職大学院教授)、「突然起きる学校危機に対応するために」、生徒指導のトラブルに向き合う」、明石要一先生(千葉敬愛短期大学学長)、「地域理解と食育のススメ」、天笠茂先生(千葉大学特任教授)、「Society 5.0の学校・教師、新しい時代の初等中等教育」、石塚謙二先生(桃山学院教育大学教授)、「二人ひとりの共生社会の実現を目指して」と、七名の先生方がそれぞれのテーマのもと助言・指導をしてくださいました。



http://www.kakyoren.com/
E-mail: info@kakyoren.com
毎月10日発行 定価1部50円
(年間1,000円 送料とも)
会員の購読費は会費の中に含む



香教連は、結成四十五周年を迎えた、子供中心の教育を目指し、健全なる批判力を持つ、県内最大の教職員団体です。

十一日(日)は、記念講演として、元プロボクサーで元WBC世界フライ級王者、現在はタレントとして活躍中である内藤大助氏を講師にお招きして、「いじめられっ子のチャンピオンベルト」の演題のもと、中学生当時の壮絶ないじめ体験や、教師が児童生徒のちよつとしたサインを見逃さないよう常に見守っていることの重要性や必要などをユーモアを交えながら軽快なトークで御講演いただいた。



その他にも、学習指導A(我が国と郷土の歴史や伝統・文化への理解を深める学習指導)部会、学習指導B(主体的・協働的に解決する力を育む学習指導)部会、道徳教育部会、健康教育部会、学校マネージメント部会と七つの分科会で、全国の先生方が様々な取組を発表され、たいへん実りある研究をさらに深める分科会となった。

私が御指導していただいた当初は、なかなか理解・実行していくことが正直難しかったです。しかし、意識し続けながら職務に取り組みでいくことで、おこましいのですが、御指導いただいた時よりは、子どもたちの様子や状況を広い視野で観られるようになり、言葉においても、より多くの肯定的な表現のもとで、子どもたちに関わられるようになったと実感します。と言っても私まだまだ未熟ですので、御指導していただいたことを引き続き心して、職務に取り組みしなければならぬ次第です。(順)

①私たちが教師がよく叱る時は、イライラしている時
教師の熱心さから起こるイライラです。子どもへの要求が高くなり過ぎて起るイライラです。「いいねい」に指導したのに、どうして直そうとしないのか。「何回も話したのに、どうして直そうとしないのか」。熱心さから起こるイライラは、「な、なに」がずっと続くと、教師の熱意のこもっている証拠です。しかし、「熱意をこめれば子どもは変わる」とは短絡的に結びつかないのです。その逆が意外に多いのです。熱意がこもると、要求が高くなり、今まで見えなかった子どもの欠点が目につきます。目につくから、つい注意を与えることが多くなるのです。

②叱ることが多くなくなった時は、一歩下がって観ることも子どもとよい距離を置いてみることもです。極端な言い方をすれば、イライラする日は子どもと深く関わらないことです。「子どもと深く関わらないこと」とは、無責任なことや、子どもに受け止められないこと、とは、無責任なことや、子どもとよくいく方法なのです。ただし、はじめから熱意もなく手抜き指導をしている教師は除外です。信念をもち熱意のこもった指導をしている教師は、こんな時は敢えて子どもとよい距離を置いてみることを勧めたいです。そうすると不思議なくらいイライラが消えていきます。そして、「何でこんなに焦ってイライラしていたのだろう」という気分になれます。

学級づくりにおいて、わざわざ「子どもから離れてみない」と主張するのはどうだろうと思ってしまう。でも「離れてみる」が良い場合もあります。「子どもをぎりぎりに取り組んで伸ばしてやろう」と情熱をもちろにぶつけ、真剣に取組んできた経験があるからこそ、敢えて「子どもから離れてみない」と主張するので、人の心とは不思議なものです。不思議とゆつたりと子どもを観られるようになります。叱る回数も激減します。

教師といえども未完の人です。熱意から起こるイライラでも、心にゆとりがない時には、やっぱり叱る・怒ることが多くなります。それが自然な姿です。決してあなただけではありません。安心して下さい。

温故知新
今回は「叱らずに済む方法」です。学級を一つにまとめ、子どもたちに最大限の力を発揮させるというところ、つい叱ることが多くなってきました。教師の情熱が燃えれば燃えるほど、叱ることが多くなってきました。情熱がこもると、どうしても子どもへの要求が高くなり、できていないこと、努力の足りない目に目が奪われます。子どものマイナスマネジメント、気になり出すと、それに伴って叱ることが多くなってきました。時には、「叱る」を超え、怒ってしまうことにもなります。逆に、のんびりと力を抜いておいたり構えていられます。でも、ただのんびりしているだけでは、子どもを伸ばすことができません。